

2016年6月11日(土)「金森俊朗の授業論と模擬授業」感想

授業の最後、自分とつながる、自分が見えてくる…ということが、最初どういうことなのだろうと思っていましたが、海蔵さんの生き方を読んでいくうちに人間の幸せとは、豊かさとは何だろう？そして自分はどう生きていくのかということに行きつきました。子どもが「知りたい！読みたい！書きたい！」と内から湧き上がってくるような授業をめざしたいと思いました。

海蔵は「いよいよこうなったら俺一人の力でやりとげるのだ」といったが、私は、海蔵は決して独りぼっちではなかったと考える。海蔵の中には母や地主の言葉がしっかりと生きていたのではないだろうか。

また、肉体としてはこの世から消え去っても、その人が考えたことや、思い、やり遂げた仕事は、後世にも引き継がれることを強く感じる作品だった。ありがとうございました。

今回の作品を読んで、自分のことしか考えないと動けない、人の気持ちがわかり、人の気持ちをくんで、実際に見たことを大切にしないと、大事なことが見えないぞ。海蔵も欲に負けて悪い心になったり、目の前のリアルを、世界を、ちゃんと見たり、目を養うことが大切だというメッセージに感じました。子ども達のなかのリアリズムを無視して教科書を読んでもそれは学んだということにはならないのだと思います。重いがあふれ、突き動かされるように、語りたい、伝えたいという学びの実現のために引き続き勉強したいと思いました。

子と子、子と教師、子と地域をつなぐものに文学がある。算数、社会でもできるのかなと思いました。そして遊ぶ時間がない。一番の障害は、子どもが遊びを失ったこと。子どもを生かすために仕事をしたいと改めて思いました。ありがとうございました。

金森先生、とても勉強になる考えされられる模擬授業をしていただき、ありがとうございました。今日が楽しみで一週間の幼稚園実習を頑張れました。1年もの期間をかけて教材を見つけ、文学を研究することの重要性と文学の面白さを改めて感じる事が出来、自分ももっと頑張らないといけないとわかりました。今日の学びを今後の自分につなげていきたいと思えます。今日は貴重な時間をありがとうございました。

今日学んだことはたくさんあります。特に2つにまとめて書きます。まず、一つ目に先生の勉強がどれだけ大切かということです。先生の教材研究なしに、子どもに何を伝えることが出来るのかと深く考えさせられました。やっぱり未熟者なりに今は勉強をしたいです。そしてもう一つは自分にも海蔵の母のようなお母さんがいると気づけたことです。教材を通して、自分の周りとは照らしあわすことが出来ました。今の周りを大切にしたいです。

現在住んでいる地域の小中学校が近い地域と統合され、それでも1学年20人弱で中学卒業までいくと思います。体育の授業でできる種目や、音楽では、合奏できる楽器、休み時間にはドッジボールができないなど、デメリットがとても不安です。中学にあがると、部活動もかぎられますし、授業でも、良い意味での競争心をも育たないと現役の教師から聞きました。現在年少の娘を持つ母親です。教師ではありません。小学校の先生も、少人数学級のメリットを生かすような教育をしていないと感じました。(散歩しているときに、外で生徒に対して先生を拝見して思いました)やはり人数は多い方が良いと思うのですが、金森先生はどう思われますか？

本日は貴重な講演をしていただき、ありがとうございました。私が今回この講演を聞きに来たのは大学の講義で日本一の先生として金森先生を紹介していただいたからです。本当に今日は聞きに来て良かったです。教員を目指す私としても、勉強するべきだとあらためて実感しました。本当にありがとうございました。是非機会がありましたら、岐阜聖徳学園大学でも講演していただきたいです。お体に気をつけて、早く万全な体調に戻ることを願っています。ありがとうございました。

私は教育大学に通っていて、今、自分がどんな教師になりたいのか、務まるのか、不安だらけでさまよっている状態でした。講演を聴いて、今、私はもう一度自分が教師になる意味、どうなりたのかじっくり考えていきたいと感じました。いろんな本を読んで、新しい自分に日々出会おうと思います。それが、後に教師になると決心したときにも、最大の引き出しになると思いました。本日は貴重な時間を頂、ありがとうございました。さすが、私の大学の先生が紹介した日本一の先生だと思いました。

道徳の授業で高橋尚子や、北島康介の授業を参観しましたが、「高橋さんはすごい」「北島さんのようには出来ない」という振り返りが多かった。能動的なところが強調されているから、子どもたちの心には入ってこないのだと感じた。

久しぶりに文学作品をじっくり読み、味わうことが出来たように思います。「手ぶくろをかいに」や「ごんぎつね」は授業をしたことがありますが、「牛をつないだ樫の木」を読むのは初めてでした。最後の「ただにこにこしながら町の方へ坂をのぼっていきました」の海蔵さんの気持ちが伝わってきました。その後の七の場面もすごいと思いました。素晴らしい作品と出会わせてくださり、ありがとうございました。

文学的文章の読みについて、言語活動のことを言われることが多かったのですが、違った目線での読み方を知ることが出来ました。リアリズムを大切に、子どもの中に入っていく学びを提供できるようになりたいと思いました。

私は今日の講義から”人”は必ず死があり、それがいつかはわからない。一人ひとりが生きる時代、生死を乗り越えてつなぐものがあるということ、それは、本当に感動的なものだと感じた。

今日は文学の授業を受けさせていただきました。子どもたちへのメッセージとして、何を大切にしていくか、今まで悩んだことの答えが少し見えてきたように思えます。ありがとうございました。

「牛をつないだ樁の木」の話に入り込んで講義を受けさせていただきました。今の教育にかけている点をととてもわかりやすく解説してくださったので、それを踏まえて明日から授業をしていきたいです。

教科書の教材には、海蔵さんのような人が取り上げられているものがないと思っていた。もっと教材研究が必要だと思ったし、そのためにはたくさんの本を読まなければならないと思った。

久しぶりに金森先生の講義を受けました。自分では、頑張って読み取りをしていたのですが、様々な人や金森先生の深い読み取りを聞いて、まだまだ足りないと思いました。深く読みとれるよう様々な経験をつみたいと考えました。

久しぶりに金森先生のお話、授業からたくさんのことを学びました。現場では、活用力、アクティブラーニング、成果物といろいろなことを叫ばれ、国語もあわただしいですが、今日でも視点をたまに変えることの大切さ、一つの物語を選び抜き、子どもと味わうことの大切さを感じました。ありがとうございました。

子どもにとって文学はどういう意味があり、具体的に金森さんが紹介してくれた作品をとおして、自分や人間を見る大切な教育だと実感した。文学のよさを感じるステキな時間でした。

学力についての解釈、物語を通しての発達の広げ方、子どもたちに本を読むように進めるのに適した方法など、様々なことを学ぶことができました。

自分一人では読むこともなかった書名でしたので、とても良かったです。「海蔵さんは誰でもとっつかまえて、言いたい気持ちでした。しかし、そんなことは言わないで、ただ、ニコニコしながら町のほうへ坂を上っていきました。」が、とても心に響きました。私の仕事に似ているせいでしょうか。

絶対面白い、ためになるとわかっていても、いざ、講座に向かう瞬間はつい足踏みしてしまいます。今日は同じゼミの友達を誘って、元気よく来ることが出来ました。金森先生のお話を聞いた時、少し道が見えてくるように感じるのに、小学校に戻ると気づけば残念なことばかりしています。年に何度か頑張っただけで会いにくることで、自分を見つめなおし、また頑張ろうという気持ちになれます。今日、たくさんの本の名前をメモできました。読書の時間を増やしていきたいです。ありがとうございました。

本をよむことの大切さが今まで以上にわかった。

私が心に残った絵は、参照の終わりの場面です。しんたのむねをのぼっていく海蔵さんの姿です。自分が変わっていかなければいけないと思っていたからかもしれません。人は変われるのだと、周りの人から影響を受けながら変わっていけるのだと勇気をもらいました。今日はありがとうございました。

今日の講義では、新しい文学を読み、考えることで、ただ、教科書をこなすのではなく、教材研究の質や量が教師には大事だということを改めて考えさせられました。まだ、先生の授業を日々受けられるので、いろんな事を吸収していきたいです。

金森先生の3回の授業論を受けることによって、自分の思い描いていた授業のイメージを変えることが出来ました。松村先生が「人が人に変えられる」と言っていたように、まさに、金森先生によって、私は変わることが出来ました。ぜひ続くことを期待しています。

小学校で授業をするとき、何を伝えたいのか教師がしっかりとわかっていないといけません。そうすることで、子どもに伝わるし、良い授業になる。授業とは、学問、文化、世界、何事、自分、人間が見えてくる。

はじめて読む題材で、感銘を受けました。地主が変わったように、利助もきっと心うごかされ、海蔵が一步踏み出したことが広がったのではないかと想像しました。

リアリズムとは・・・リアリズムについてもっと考えようと思った。リアリズムに対する理解を深めたい。そうすると、牛のつないだ樁の木をより理解できて、考えられるものも増えると思った。

本を読むということがどれだけ大切かということを知った。

私は自分の性格が利助と似ているなと思っていました。最後の七の場面では、道につかれ

た人々と具体的ではないため、自由に自分なりに想像することが出来ます。学生、働いている人々・・・たくさんの中に利助もいると私はイメージしました。あの時は、協力する気持ちが沸いてこなかったけれど、他人のために行動することの大切さを海蔵からうけついでいてほしいと思いました。地主が変わったように、私に似ていると感じた利助にも変わってほしいと感じました。同時に私もそうやって、変わっていきたいと思いました。ありがとうございました。

今まで知らなかった作品を学べて、新しい知識が増えた。おもしろい内容でよかった。最後の模擬授業、ありがとうございました。

学生の今のうちにいろんな文学作品にふれようと思います。教えるものが耕されていないのに、子どもを耕すことは出来ない。今のうちにたくさん学び、自分の知識を耕しておきたいと思います。ありがとうございました。

国語もそうだが、授業や教科書から「リアリズム」を感じられるように、教師は工夫をしていかなければいけないのだなと思った。

教材選択も教師の大切な仕事だとわかりました。また、年度当初の学年の教科書の目次を見て、何、どこを育てるかを見極めるという話も、とても勉強になりました。ありがとうございました。

新美南吉作品はいくつか知っていましたが、このお話は詳しく知りませんでした。私は実際に半田後に行きましたが、生家を含め、新美南吉に関わる多くのものが残っていました。金森先生のお話を聞き、語り継がれ、受け継がれていると改めて感じ、それが、新美南吉の作品にも表れていると思いました。本日はどうもありがとうございました。

今回の講演を受けて児童文学の大切さを実感しました。自分で学びたくなった。私自身、本を読む習慣があまりないが、そんな私でも心が動かされた作品があるのだから、この気持ちを子どもに伝えたいと思った。

今回の講義で、教師がプロと呼ばれるならリアリズムをしっかりと伝えられる語りが大切であり、読書の必要性を強く感じた。人の言葉が人の行動を変えるというのが「牛をつないだ樁の木」を読んで深く感心した。

「牛をつないだ樁の木」は、一つ一つの場面の描写が詳しく書かれていたので、このとき海蔵はどんな気持ちなのか考えながら深く読み取っていくことが出来、とても面白かった。

教師が深く考え、子どもたちの考えに対し、共に読んでいく大切さを学べた。

自分たちの周りにも、当たり前のように利助や海蔵がいると思います。切なくて、泣けました。今、自分が悩んでいることに、道が開けた気がしました。ありがとうございました。

私は子ども二人が井戸の水を汲んで飲んでる姿を、とても想像することが出来た。特にその姿を見て、海蔵が微笑んでいるときの海蔵の気持ちが伝わりました。井戸を作るまでの過程・苦労や母、地主の会話が脳裏を巡っていたと思う。井戸ができてから、助かった人が多くいる。庶民の人も立派に「自分が生きてきた足跡」を残すことができたのだ。私も、生きていって自分が生きていた足跡をのこせるような実践や行動をしていきたいと強く思った。お疲れ様でした。社会頑張ります。

「牛をつないだ樁の木」を金森先生と読んで、涙が出そうになるお話で、海蔵さんと母親の人柄と行動・関係性がすごく心に残りました。村人のために、1杯の水を飲むために、自分で必死になって動く、好きなものも我慢して、その人柄と支えられている周りの人を知り、自分を見つめられる作品であると共に、自分もこうなりたいとか、自分を動かしてくれた人はだれかな？とか考えられました。プロとして、そのような作品を探す！それを目指したいと思いました。これからの元気・希望になりました！

別の話ですが、何気なくボケっとすごしていた大学時代から「学びたい！子どもが本当に学びたいと思っていることを学びたい！」と学びへと動かしてくれたのは、あの上越教育大での金森先生の講義があつてからでした。もっともっと学んで、周りを大切にして、子どもと豊かに学べるよう頑張るぞ！ありがとうございました。

先日は「牛をつないだ樁の木」の講演、模擬授業をありがとうございました。まず初めに、冒頭(①頁)を読んだとき、私はこの話の主人公は「牛車ひきの利助さん」かなと思いました。なぜなら、町の年取った地主が樁の若木に牛をつないだことに対してかんかんに怒っていたからです。そこから利助さんと牛、樁の木を中心に物語が展開されていくのかと思っていました。しかし、②になると人力ひきの海蔵さんが利助さんのために謝ったり、利助さんの気持ちをくんでやったりと自然と海蔵さんが中心となっていくのかなと思いました。

二場面では、最初に井戸ほりの新五郎さんが出てきて、次に年とったお母さん、利助さんが登場してきます。そこから四場面の終わりまでに海蔵さんの仲間の人力引きの源さんも登場します。底までの間だけでも海蔵さんは周囲にとっても恵まれていることが分かりました。新五郎さんも海蔵さんのお母さんに物事を細かく説明しています。③頁のお母さんがしんたのむねあたりを通る人々を数え上げたときに具体的人物を九人挙げています。ただ挙げていただけではなく、「●●から××へ通う▲屋の★さん」というような説明まで入っていることに驚きました。また、源さんがちはいつもと様子が違う海蔵さんの事を心配しながら

らも、二年間見守り続けたのだらうなという姿が目には浮かびます。このように新五郎さん、お母さん、源さんたち（人力ひき仲間）のような海蔵さんを温かく、心配しながらも見守り支えてくれる周囲の力があつたからこそ、海蔵さんは二年も頑張れたのだなと思いました。

五場面では、二年後の地主のやり取りが書かれていますが、ここでお母さんの一言で改心し、行動した海蔵さんにとっても感動しました。お母さんの一言で、胸を疲れた次の日の朝はやくに正直に地主に謝り、病気の回復を願う行動は地主の老人だけでなく、多くの読み手も感心したと思います。私が海蔵さんだったらお母さんに一言いわれても地主が死ぬのを待っていたと思います。死に際の地主までも変えてしまう海蔵さんはすごいなと思いました。

最後の六、七場面は衝撃でした。海蔵さんが兵士となり、花とちっていくとは思ひもしなかったからです。改めて戦争の恐ろしさを感じました。しかし、自分の目で自分が年月を書け、試行錯誤し、みなの手でつくった井戸を見、美しい水を飲んで喜ぶ人々の姿を見たとき、きっと海蔵さんは嬉しかったらうなと思いました。私もとても嬉しい、喜ばしい気持ちになりました。今でもその井戸があるのか分かったので、夏休みにでも行ってのどがカラカラの状態で飲んでみたいなと思いました。

この話の後、私は海蔵さんの視点で感想や質問を考えていたのですが、岡村先生や松村先生、そのほかの方々が海蔵さんのお母さんの視点、井戸で使っている人、その人とお母さんの会話のことなど、多くの視点に立ち、その後の姿を想像していて、面白いなと思いました。私も何度も読み返し、利助さん、源さん、お母さんなど、いろいろな視点に立って想像してみたいなと思いました。

この「牛をつないだ樁の木」を読み深めたことで金森先生の「自尊感情豊かにはぐくむ子育て、教育」で述べてあつた人格の芯となる自尊感情、特に「文化的自尊感情」を実感することが出来ました。⑩の「しかし、海蔵さんの残した仕事は今でも生きています。」から終わりまでの文を読んで、「海蔵さん」は私の父で、「のこした仕事」は私なのかなと思いました。

私の父は中学校の教諭で英語を教えていました。父は私が小学校五年生のときに肺がんで亡くなりました。このことをあまり自分自身の中で受け止めることが出来ていなかったのですが、大学に入り少しずつ受け止められるようになりました。大学の友達にはいまだに言っていないです。「牛をつないだ樁の木」を読んで現場の先生方の意見などを聞き終え、海蔵さんと母の関係、井戸の存在の事を考えていると、ふと私にとっての海蔵さんや母の存在を考え、そのように思いました。「文化的自尊感情」を学問的科学的に学ぶことは難しいのではないかと思つていましたが、実感してみると、こんな授業を展開できる金森先生やその仲間たち（REDeCを受講していた人たち）は本当にすごいなと思いました。海蔵さんと周りの人たちみたいです。まだまだ書き足りないのですが、とりあえずいったん書き終えます。先生の模擬授業のアンコールを望んでいます。本当にありがとうございました。